2016年1月1日発行（奇数月1日発行）通巻第44号

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol. 44
2016 睦月・如月

謹賀新年

未来を照らす子供たちの夢や希望、自己の可能性の開花結実。
大きなエネルギーで共につくり上げる一年でありますように。
皆様のご多幸を祈念いたします。

金剛禅総本山少林寺代表　大澤　隆

鼎談

創始70周年に向けた“架け橋”たる年に

創始70周年に向けた〝架け橋〟たる年に

「国づくりのための人づくり」……これは、開祖が少林寺拳法を創始した原点の思いである。創始70周年を来年に控えた本年は、その開祖の志を私たち指導者一人ひとりが今一度見つめ直し、この活動をより一層価値あるものへと高めていく年としたい。そこで今号では、宗由貴師家（そうゆうきしけ）、大澤隆（おおさわたかし）代表、宗昂馬（こうま）副代表が新年における教団の抱負を語り合った。

2015年11月20日
金剛禅総本山少林寺東京別院
にて
担当／飯野貴嗣

中高年に活力を

代表　本日は、新年を迎え、金剛禅運動の展望、教団としての夢や希望を互いに語り合いたいと思います。

副代表　今年は少林寺拳法創始70周年前夜の年となります。機構改革によって道院の形態を整え、いよいよ私たち金剛禅が今の時代に貢献できる運動をより一層充実させ、そして70周年につなげていければと思います。

師家　今、私たちの教団は、時代に則した教団への改革によって〝乗り越えた〟というより、今まさに〝乗り越えよう〟としています。決して後手に回るのではなく、門信徒の皆さんに先を照らし、導き、道院長を支援していくものでなくてはなりません。そのためには、まずは本山事務局から、いかに「事後処理的な仕事」を減らし、「先を生み出す仕事」を増やしていけるかが重要になってきます。

代表　そのとおりです。昨年の道院長研修会では、実に多くの道院長から意見が出されました。それらの〝声〟を委員会や内局でしっかり揉（も）んで、再度道院長へお返ししていく予定です。

師家　それから、私たちは常に社会の動きに敏感でなければなりませんね。教団の存在意義は社会の中において発揮されるものですから。そこでまずは、今後、中高年層が一層増えていく中において、それらの人たちに対して、道院としてどんな場を提供することができるかです。中高年の人たちが求めている生きがいや喜び……、それが満たされることで明日への活力が生まれます。そして何よりも健康でないと充実した日々を送ることはできません。まさに身心の健康を感じていただく場として、道院は最適だと思います。

代表　中高年の方々の中には、働かれている人もおられるでしょうが、仕事を完全に引退され、社会との接点が一気に減ってしまうと、どうしても元気がなくなっていってしまうと思います。そんなときこそ、地域に〝コミュニティとしての道院〟の門戸が開放されていれば、そこに社会とのつながりを求めてくる人たちが集まるようになりますね。

副代表　まさに「少林寺拳法コース制」を活用できますね。その場に集う人に合わせて、無理なく適応できる〝柔軟性〟がコース制の特徴でもあります。教団としても、このコース制の有するパフォーマンスをより一層強化していきたいと思います。

師家　道院長がこれからの道院の活動の広がりとして、コース制を活用していただけると、本当に地域の人々に喜ばれるようになると思います。

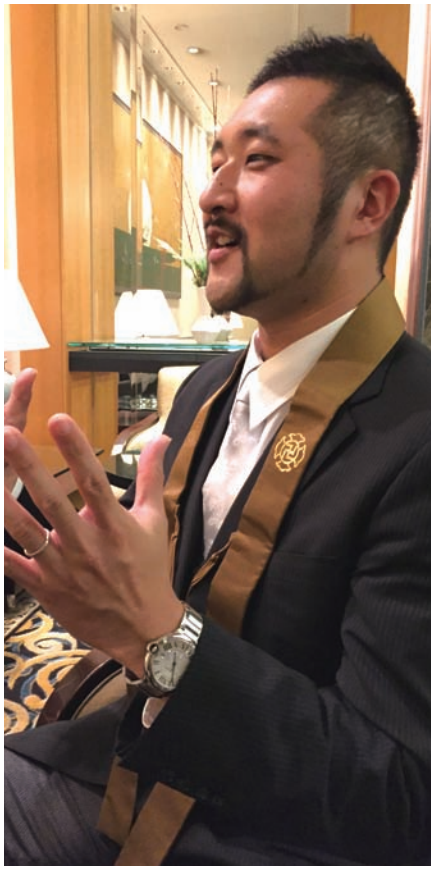
子供たちを育む

副代表　子供を取り巻く環境も変わってきています。

師家　日本の生活空間での家族構成、経済的事情からの両親共働きの世帯が増え、子供を取り巻く環境も激変しました。それに伴い、本来行われるべき家庭教育や地域社会での教育がなかなかできにくくなりつつあります。そんな中で、世代を超えた人たちが集う道院には、子育て支援としての環境も整っているといえます。それは道院長一人で行うのではなく、みんなで関わり合い、触れ合うことで、子供たちの人間形成にとてもよい影響を与えることができ

金剛禅総本山少林寺　代表　大澤 隆

少林寺拳法　第二世師家　宗 由貴



金剛禅総本山少林寺　副代表　宗 昂馬

ると思います

代表　子供にとっては、もしかすると、道院長よりも、遊んでもくれるお兄ちゃん先生、お姉ちゃん先生のほうが親しみやすかったりします。少年部に活気がある道院は、道院長があれこれ指示をせずとも、子供同士で教え合ったり、あるいは号令をかけ合ったりして、ちゃんと機能しているんです。つまり、子供たちが、少しずつ自主性、主体性を身につけていっているのです。

副代表　私も少年部のころに、鎮魂行の主座や打棒を、「やりたい者はいるか？」と道院長から言われたときに、競って手を挙げたことを思い出します。これって非常に緊張するんですが、内心は本当にうれしいんですね。そしてやる以上は失敗できないから、ふだんから大きな声で唱和するようにもなる。すると、周囲の子供たちも触発されて、全体が大きな声であの難しい教典を唱和できるようになるんです。子供の可能性は無限大ですね。

師家　大人が「こうしろ」と押さえつけるのではなく、子供が「楽しい」とか「うれしい」と感じさせてあげることができれば成功ですね。

代表　そのためには、指導者は一人ひとりの子供を見ていなければいけませんね。その子のすばらしいところがどんなところなのか、そしてそこを褒めてあげるとその子は喜びます。ある少年拳士に「君はすごいね。だって、大人は道院を休むけど、君は休まないじゃないか。それはすごいことなんだよ」と言って褒めたんです。すると、その子は更に練習を休まなくなって、より生き生きと練習に取り組むようになったんです。

師家　私たちが大切にしたいこと、それは一人ひとりに向き合う、ということですね。そういうことを大切にしている道院はおのずと活気が湧いてきます。代表が道院長研修会で言われた「町医者」って、私すごく気に入ったんです、やっぱり道院長って、ある意味町医者であるべきと思います。

代表　そんなに症状が悪くなくても好きな先生のとこへ行くと、いろんな仲間や毎日来るような人たちが待合室にいて、そんなに症状が悪いわけじゃないけどお薬をもらいにくる人たちと、そういう場で雑談をしてそれが毎日の楽しみになる。自分では気づかないことを家族よりも自分のことを知ってる人や、先生なら気づいてくれる、それが道院長であっ

たら、これはもうすばらしいことです。そういった環境であれば、みんなも安心して道院に来たいと思うと思いますね。これからはもっと可能性を広げてもらえるような道院づくりが必要なのだろうなと思います。

副代表　開祖が少林寺拳法を、何を目的として創られたか、という原点に立ち返りますね。あと、今教団では道院の活性化、特に子供たちの想像力や活力を伸ばしていけるような取り組みとして、絵本を用いた取り組みも構想中です。近々全国の道院長の方々にも紹介していく予定です。

師家　それは道院での楽しみが広がる可能性を持っていますね。ぜひ積極的に推進していきましょう。

今、大切にしたいこと

代表　さて、冒頭に副代表もいわれましたが、いよいよ創始70周年の前年となります。そのためにも、この一年間を日々大切に過ごしていきたいものですね。

副代表　創始70周年の総合テーマは、「架け橋たれ！」です。このテーマに懸ける思いは、同じ世代間での「架け橋たれ」、異世代間での「架け橋たれ」、そして国を越えた「架け橋たれ」……、いろんな意味が込められています。私は創始70周年事業プロジェクトの一員として、この事業を推進していく使命を頂いていますが、私が自分自身へ問いかけていることがあります。それは、単に金剛禅の可能性があるということで、活動の裾野を広げるのではなく、まず、開祖の志、あるいは金剛禅の原点、それをシンプルかつ濃厚に理解・整理することです。そして、過去ではなく、今の時代にそれをどう活用していくかを、自信を持って展開する組織づくりに取り組んでいきたいと思っています。

師家　私たちはよく「人づくりによる国づくり」と言います。でも、もしかすると「国づくり」が言葉だけで止まってしまってはいないか。新年にあたり、今一度指導者が自己に問いかける必要があります。開祖がかつて日本を憂い、日本の復興を志したのと同じように、私たち金剛禅運動の指導者が、今の日本を直視し、日本の将来を見据え、そのためにはどんな人を育てていかなければならないのかを、真剣に考えていかなければなりません。

　例えば、戦後70年の昨年、日本は大きな方向転換をしました。教団としては戦争は絶対反対です。だからこそ、軍事力の増強、武器・防衛装備に対して、「やっぱりしようがないじゃない」というのは絶対ありえません。それはなぜか、というところをしっかり信念に持ち、人を教育しなければなりません。安保法案の問題に対していろんなふうに考える人がいたって自由じゃないかというのは違うと思います。

代表　信条第二の「我等は、愛民愛郷の精神に則り、世界の平和と福祉に貢献せんことを期す」に込められた私たち教団、いや、少林寺拳法グループ全体の、文字どおり「信条」とするところですね。どこまでも平和的な手段によって、理想境建設に邁進していくことが私たちの運動のあるべき姿勢ですから。

　そしてそのために、教団の第一線の指導者である道院長が、志を一つにする。そして、一人ひとりの力だけでなく、道院長全体の力を結集し、金剛禅運動の推進力にしていきたい。それが、日々の地道な道院活動（国づくりのための人づくり）であり、あるいは宗道臣デー活動のような、地域社会に向けた活動の意義をより高めていくはずです。

副代表　かつて、アメリカのジョン・F・ケネディ大統領が、「国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるのかを問うてほしい」と言われました。自分が国のために、少林寺拳法や道院という空間を活用して何ができるか――まさにその言葉のとおりだと思います。

代表　そうですね。この一年、新たな気持ちで、清々しく、明るく楽しく、全国の道院長とともに取り組んで参りましょう。よろしくお願いします。

ふだん着の金剛禅

財務部　部長　宮本 公己

一歩一歩

四国山地に位置する石鎚山は、西日本最高峰の山で、日本百名山の一つ。男性的な山容は、切り立つ断崖の岩稜と原生林に覆われ、四季折々に変化するとても魅力ある山だ。初めて登山したのは25年前。一歩一歩必死に登り、気付くと頂上にいて、その瞬間は登り切ったという達成感があり、とても嬉しく思った。しかし、登頂目的に眺望を楽しむ余裕はなかったため、その登山道は苦しい記憶が強くある。この10年は、毎回楽しみに登る自分がいる。それは、頂上以外の登り下りの中で、眺望や山の香り、風や空気、鳥の声など、自然のエネルギーを五感で感じ、感動値が上がるからだ。道中何かを発見し、「へー」と思うと心が動き、同じ山を何度登っても受け止め方が変わる。頂上だけを目的にした思いは、時には苦しみの元を自身でつくってしまったように思う。現在まで毎年続けられるのは、その日そのときの体調や体力に合せて、自然の法則に従う謙虚な気持ちと、今年も無事登ることができたという感謝の気持ちによって、清々しい頂上を感じることができるからだ。開祖は、「人間、死ぬまでが修行だ」と教えられた。修行とは、難行苦行だけではない。何かに気づき、自分の糧になるよう、生涯を通じて体力に応じた技を極め、術を楽しみ、無理のない修行を積み重ねていきたいと思っている。

開祖語録ダイジェスト

1967年度
第１次指導者講習会

それぞれの細胞が、命のあるかぎり働いている。すばらしい自己である。そのすばらしいものをすばらしくしないのは、諸君の考え方の中にある。自分は宇宙のそういう一つの表れであるという自覚が本当に自分のものになったら、人のできることは自分にもできるということに通じるはずである。

「俺はだめなんだ」を言っちゃいけない。今日からそう思いなさい。必要ないものは、この宇宙には存在しない。

私がよく言うでしょう。「必要なくなったら、わしは死ぬ。必要の間は死にはせん」と。もちろん病気や怪我をすることはあるが、でも死にはせん。「生きている間は死なん」という言葉で私は表現している。生きているという事実が、諸君の存在を必要としている。それにどう応えるかによって、人生というものは変わってくるのです。

そういう自信を、これから毎日、寝る前でもいい、朝起きたときの、たとえ3分でもいい、考えてみようじゃないか。私の人生観が三度大きく変わったのは、そういうことをはっきりと認識したからです。宇宙の実在の中に調和した自己というものを見いだしたから、私の人生観は大きく変わった。

俺はだめだとか、能力がないとか、先生とは違うんだとか、そんな馬鹿なことないぞ。どこが違うんだ。私の細胞も君たちの細胞も同じなんです。

頭の働きだってそう。俗にいう魂の抜けたやつ、これはもう別。しかし、そうでない者の知能差は、そう極端なものがあるはずがない。

自分で自分を捨てるのが、いちばんいけないのです。

生きているという事実に
どう応えるかによって人生は変わる

法を問い
学を修める

vol.44

文／松本 好史

「全ては自らのことなり」

「命のある間は死ぬのではないのだから、死ぬ死ぬ、とむやみに言うものではない」

「人間死ぬまでは負けたのではない。生きている間は何度でもやり直せる。諦めるな」

「人間は、ダーマの分霊を受けたすばらしい存在である。自らの可能性を信じることで、他人も認めることができる」

「搾取、支配のない理想社会、理想境となる社会をつくるのは、人、一人ひとりの質をよくすることである」

開祖は、このような言葉で我々に生き方を投げかけられました。

少林寺拳法の技法とともに、これら教えの原点を真摯（しんし）に解釈し、実践することが、行としての少林寺拳法であると、入門35年以上の今になって、やっと実感し自省できるようになった気がします。そうです、まだ、「そんな気」という段階です。

人間の思考は、人それぞれに違います。当たり前といわれそうですが、だから、自らの意志で、見て、聞いて、感じて、そして考え、多感であるとともに気づきがなければ、真実はなかなか見えないものであることも、この年になってやっと感じます。

私の入門は17歳。多感な時期でした。そんなときに開祖の言葉に触れ、心を動かされました。そして、人生とともにじっくりと教えを考えてきました。

今まで続けた動機の原点は、開祖の数々の言葉が心に響いたことにあります。そしてこれは、勇気の源でした。

開祖は開創期、入門した若者に、「私と一緒に、この日本を立て直し、誇りある国家に変えようではないか」と熱く語られたといいます。敗戦国の惨めさを目の当たりにして、開祖は、まさに「死ぬまでは諦めない」を自らが実践されましたが、我々は、教育手段としての少林寺拳法であることを忘れてはなりません。

このような開祖との出会いが、多くの若者の人生を自己確立と自他共楽の道に大きく舵（かじ）を切らせ、それぞれが、その人生が有意義であることを自覚したと思います。

「布教者（指導者）の原点はここにあり」で、布教者の基本は、個々にさまざまな「気づき」を促し、それらの自覚により、どう生きるかを自分自身の責任において決定する力を養わせることだと思います。

天国も地獄もこの世にあると、私は、祖父や父からもよく聞きました。

そして、それを社会運動として実践していた少林寺拳法という「単なる武道やスポーツでない」組織の目的に感銘を受け続けてきました。

資格や立場が少しずつ上がる中で、見えなかったものが見え、聞こえなかったものが聞こえ、新たな発見や気づきは多くなりました。

そんな中で、「真純単一」にこの法を考え、それをどのように実践すべきかとも考えるようになりました。

少林寺拳法は、死ぬまで続く行であり、その根本は「全ては自らのことなり」です。

自らに問いかけ、自らに恥じない生き方を貫きたいものです。

なかなか簡単なものではないですが、「忽然（こうぜん）と変わることに大胆となれ」、これも開祖の言葉です。

変わる、変われる勇気を持ち続けたいものです。

二つの理由

群馬前橋道院 道院長　江原 謙治

私がこの道の指導者で一生あり続けたいと思う大きな理由、それは二つある。

一つは、大学少林寺拳法部時代に遭遇したある事件。いや、事件と呼ぶのは少し大げさかもしれない。しかし、私にとってはそう表現したくなるほど衝撃的な出来事であった。

1970年代の半ば、まだ本山・本部の職員の先生方が山門衆と呼ばれていたころの話。学生合宿の折、山門衆の一人が、本堂の祭壇上で開祖にこっぴどく叱責を受けた。合宿に参加している大勢の学生たちの目の前でだ。

そのときの若い山門衆の堂々とした態度に衝撃を受けた。普通、偉い人に叱られれば、ほとんどの者は首をすくめ小さくなるもの。ところが若い山門衆は、片膝をついた蹲踞（そんきょ）の姿勢で、やや伏せ目がちながら下を向くわけでなく背筋を伸ばし、「はっ、申し訳ありません」。その姿が、まるで時代劇ドラマ「水戸黄門」の〝助さん、格さん〟を連想させた。いや、格好いい、見事だ。それこそ私の求めていたものをそこに見た。

私は父から常に「へいこらするな」という教育を受けていた。つまり、人に媚（こび）びるなということだ。「礼儀」と「媚」は別のもの。「媚を売るやつは、場所が変われば人を見下す。そんな手のひらを返す人間には絶対になるな」と。世の風潮として、人前で叱られることは恥と捉（とら）われがち。だが、叱られ方によっては逆に格好いいのだ。そんなことを痛感した。

最近の若者は、「叱られ慣れ」していない。あらゆる面で打たれ弱い。叱られたときに、その内容よりも、「こんな人前で叱られるなんて……」と体面ばかりを気にしてしまう。

だが、潔く反省する姿を見せれば全然恥ではない。恥ずかしいのは、叱られることではなく、叱られて卑屈になっている姿を晒（さら）すことだ。

きっと山門衆の人たちは、その若い山門衆だけでなく、皆そんな叱られっぷりだったのであろう。技のすばらしさに加えてのそんな凛々（りり）しい姿に、自分の選んだこの道は決して間違っていないと確信した瞬間だった。

そして、もう一つの理由。指導者は、少林寺拳法を職業としてはならないということ。

私たち指導者は、道院を設立する際に、所得証明を提出することが義務付けられている。それは、きちんと職業を持っていて、少林寺拳法を決して〝メシのタネ〟にしない、ということを証明するため。これは、他武道、他教団の組織には見ることのできない、すばらしいシステムだ。

我々は、技の指導だけでなく、法話をはじめとして、人生、社会についての教訓なりを拳士たちに話したりする。拳士だけではなく、時として保護者たちにも。

そんなとき、「話はすばらしい。が、所詮は少林寺拳法屋さん。社会のことなど分かるのか」と思われたらそれまで。しかし、きちんと職業を持ち、その上で時間をつくり、青少年育成や布教に携わっているとなれば、説得力も違ってくる。

もし、職業にしていいという話にでもなれば、弟子の取り合いにもなりかねないし、何よりも、真の意味での教育は決してできなくなる。だからこそ、入門希望者から電話をもらったときなども、相手の住所を聞き、より近い道院を紹介してあげたりすることもできるのだ。

この道を歩み続けたいと思う理由を挙げれば、それこそ「教え」を含めてまだまだたくさんある。しかし、この二つこそが、私にとっての最大の思い入れであり、誇りなのである。

投稿大募集　〒764-8511 香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48　金剛禅総本山少林寺 広報誌担当宛　TEL.0877-33-1010
FAX.0877-56-6022　e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp　※投稿記事は20字×69行を目安とし、名前、所属、連絡先を忘れずにご記入ください。なお、誌面の都合上、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。

ダイジェスト

道院長 vol.29

元気の素

日進南道院
道院長 宮地 峰樹（45歳）

今の自分を褒めてあげられたら、明日はもっと頑張れる

――道院長になろうと思ったきっかけは何でしょうか。

道院長になりたいと漠然と思ったのは、高校1年生の夏、初めて3級の昇級試験を受けたときからありました。

ただ、きっかけとしては、本山で受講した少年部指導講習会でした。講師の先生方や多くの仲間とともに語り合い、自分が歩む道は何なのか、自分は何ができるのか、自問自答したあの少年部指導講習会が、道院長としての今の私の原点だと思います。

――将来、道院長を目指す全国の拳士へ、エールをお願いします。

道院長は、特別な存在ではありません。夢は大きく、志は高く。私は、今の自分を褒めてあげられたら、明日はもっと頑張れると信じています。一緒に頑張りましょう。

※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

ダイジェスト

志をつなぐ

加藤 義秋　71期生
大導師大範士八段

「道院は家族たれ」

開祖をはじめ、すばらしい方々に出会い、育てられてきました。厳しくも優しいご指導の中で教えていただいたことは、「道院は家族たれ」の精神。金剛禅の道院は、我々荒くれた喧嘩っ早い若者たちに、居場所とぬくもりを与えてくれました。修練のあと、道院長ご自身が釣ってこられたフナの空揚げ料理を、道院長ご一家と囲んだり、仲間たちとワイワイ楽しんでは朝帰りをしてしまったり……。拳技だけでない、人との触れ合いを道院で育み、その温かさは次代につなげなければいけないと実感しています。道院長任命後も、それを実践することで人とのおつきあいが密になり、地域にも認められ、また必要とされるようになりました。「道院は家族たれ」。後進にも絶えず伝えていく所存です。

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

▼入門当時（1955年）。右が加藤大導師

禅林学園 禅林学園校友会専門部会総会・練習会を開催

2015（平成27）年8月29日、禅林学園校友会専門部会の総会・練習会が、東京別院にて開催された。同校友会は、専門学校禅林学園専門部の卒業生の組織であり、会員数は約370名。このうち約60名が少林寺拳法の所属長として活躍している。今回の行事には全国から約50名が参集し、まず、2階の礼拝施設にて総会。その後、会場を地下の道場に移し、山﨑博通SHORINJI KEMPO UNITY顧問（禅林学園前理事長）を講師に迎えて練習会を行った。練習会では、1期生から本年3月に卒業したばかりの34期生まで、期生を超えて真剣に、そして和やかに易筋行の修練に取り組む姿が見られた。なお、この後行われた懇親会には、宗由貴少林寺拳法グループ総裁（禅林学園理事長）、鈴木義孝SHORINJI KEMPO UNITY顧問、宗昂馬金剛禅総本山少林寺副代表も参加され、卒業生たちとの時間を共にした。（小林博紀）

香川西讃小教区 達磨祭法要・研修会を開催

去る10月4日の夜、香川西讃小教区として、達磨祭法要ならびに小教区研修会を開催しました。会場は、県西端、観音寺市にある琴弾道院でしたが、久保義則県教区長をはじめ、県内の道院長・門信徒が多数応援に駆けつけてくださり、総勢45名での行事開催となりました。達磨祭法要は、小教区内の道院長で導師・司会などの役割分担を行い、演武奉納は隣の小教区から駆けつけてくれた若い拳士に行ってもらうなど、みんなでつくり上げる儀式となりました。

法要終了後は、座卓を広げ、少導師・権中導師の履修科目について講義が行われました。参加者には、高校生や20代の少導師も大勢おり、教区の未来に大きな可能性を感じることができました。討議の中では、「オリンピックでフィーバーする日本において、単なる武道やスポーツではないということをどのように伝えていくか」という質問も飛び出し、参加者の意識の高さが伺えました。

研修会終了後、お弁当を囲んでの食事会も設けました。参加は任意でしたが、ほとんどの方が残って参加してくださいました。一人ひとりの学びだけでなく、道院を超えての交流もでき、教区の一体感を感じることのできる集まりとなりました。

（香川　忠）

生駒道院 高山恒一道院長勤続50年表彰受賞記念祝賀会

去る10月4日、ホテル日航奈良におきまして、高山恒一生駒道院道院長の勤続50年表彰を祝う会を開催いたしました。

奈良県教区役員、生駒市体育協会役員ほか、県下道院長および幹部拳士、生駒道院拳士・OB、総勢116名が出席され、前田武志参議院議員、高市早苗総務大臣（代理）など、ご来賓による祝辞の後、盛大かつ和やかな祝賀会が行われました。

少ない拳士で精いっぱいのもてなしを企画しましたが、学び・反省するところも多くありました。

この経験を生かし、幅広く周囲に気を配れるよう、ますます修行に精進いたします。

（宮本富博）

浜岡道院 浜岡道院創立50周年記念祝賀会

この度、創立50周年にあたり、11月7日に浜岡道院にて記念式典を執り行いました。式典は、導師献香、教典唱和より始まり、厳かな雰囲気の中で進行しました。

開祖に感銘を受けて道院を設立された山下豊生先生、朝比奈正和先生の志が、福田有希先生に受け継がれ、現在も生き続けていることを知りました。

浜岡道院50年の歴史を通して、少林寺拳法を学んだ御前崎市民は3000名以上に上り、自分たちが現在の浜岡道院拳士であることを誇らしく感じることができました。

翌8日には、静岡カントリー浜岡コース&ホテルにおいて、記念祝賀会を立食パーティー形式で開催しました。浜岡道院拳士をはじめ、関係道院拳士やOB、少年拳士保護者など、100名を超す人数が集まり、とても盛大で楽しい会にすることができました。

道院長挨拶やOBである来賓の祝辞、50年の歴史写真スライドショー上映を通して、改めて自分たちの通う浜岡道院の長い歴史を知ることができました。自分たちがますます頑張って、未来の50年につなげていきたいと、決意を新たにすることができました。

また、浜岡道院から始まった関係道院が切磋琢磨するよい関係を、今後も大切にしていく必要性を再認識することができました。

50周年を祝って終わりの会ではなく、現在の拳士が今後の発展につなげていくための、非常に有意義な会にすることができたと思います。

（小粥宣拓）

投稿大募集　〒764-8511 香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48　金剛禅総本山少林寺 広報誌担当宛　TEL.0877-33-1010　FAX.0877-56-6022
e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp　※投稿記事は400字を目安とし、名前、所属、連絡先を忘れずにご記入ください。なお、誌面の都合上、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。ホームページには誌面以外の投稿も掲載しています。

2015年10月度　認証

●道院長交代

平道院　根本 栄夫
東京王子道院　林 准哉
海老名国分道院　沼内 寿浩
愛知けやき道院　山下 誠
徳山道院　桝野 象堂
福岡正法道院　山室 鉄也
佐賀多久道院　飯盛 康一朗

法階昇格者

准範士　■2015年9月27日付

鈴木 司郎（浅草蔵前道院）
中井 強（大阪北道院）
村田 素彦（加古川米田道院）
木村 章一（西宮学文道院）

僧階昇任者

中法師

■2015年10月1日付

岸田 明彦
安田 嘉昌
須田 剛
牧野 清
山﨑 博通
大西 要
新井 庸弘

少法師

■2015年9月20日付

鈴木 裕（水戸葵道院）
沖山 聖徳（東京大崎道院）
村上 喜久（東京飛鳥道院）
片岡 三郎（八王子陵北道院）
平井 美智雄（足柄道院）
柏井 伸一（報徳桜井道院）
木戸 薫（富山南道院）
橋本 和志（岐阜可児道院）
斉藤 政実（伊豆長岡道院）
湯浅 裕二（伊豆韮山道院）
小泉 実（清水有度道院）
掛川 和弘（寝屋川西南道院）
田島 星斗（大阪三島道院）
小林 登（大麻道院）
安田 壽廣（福岡若獅子道院）
飯塚 久雄（島原城南道院）

大導師

■2015年11月8日付

蔵重 旨由（恵庭北道院）
遠藤 聡（東京辰巳道院）
是枝 直明（杉並東道院）
間々下 祥平（横浜本郷道院）
森 貴臣（横浜緑園道院）
開 博一（湘南葉山道院）
児玉 靖（刈谷北道院）
永江 健将（京都松ヶ崎道院）
濱野 慎司（姫路飾磨道院）
山田 正文（姫路白浜道院）
川口 昌宏（姫路宮上道院）

中導師

■2015年10月1日付

分藤 秀明（杉並永福道院）

■2015年11月8日付

深澤 輝彦（渡良瀬道院）
鈴木 司郎（浅草蔵前道院）
白茂 雅彦（秦野道院）
油家 千恵（三重嬉野道院）

お布施

達磨祭

岡山県教区、境港道院、浦田武尚、加藤義秋、鎌田智、小池孝忠、篠原正、庄野雅巳、田原正晴、西村建夫、本田演昭、牧野清、山崎隆尉、山﨑博通、オークラホテル㈱、㈱バイアンドバイ、㈱ヒューテック、㈱一鶴、㈱STNet、㈱いわま黒板製作所、㈱オザキ、㈱カナック・ビジネス・ソリューション、㈱サンエイ、㈱スタート、㈱ビルド、㈱ラブ・ラボ、㈱香川銀行、㈱高松ホットスタンプ、㈱高松三越、㈱坂出グランドホテル、㈱三共包材、㈱三豊印刷、㈱四電工中讃西営業所、㈱志満秀、㈱千萬、㈱前川商店、㈱百十四銀行、関西実業㈱、亀山石油㈱、香川印刷㈱、今治造船㈱、三井住友信託銀行㈱、山陽放送㈱四国支社、小田鋼業㈱、新日本印刷㈱、大和証券㈱高松支店、中讃ケーブルビジョン㈱、日本総合保険企画㈱、日本郵便㈱四国支社、富士建設㈱、名鉄観光サービス㈱、林田石油㈱、香川記章㈲、東洋防蝕工業㈲、㈲華や商事、㈲溝渕造園、㈲香川建築設計事務所、㈲細川土砂、㈲西山印刷所、㈲多度津タクシー、㈲長尾酒店、㈲買田屋果物店、㈲白光舎、ＪＲ多度津駅、ウツミ整形外科医院、医療法人社団昌樹会、㈳穴吹学園、金刀比羅宮、熊手八幡宮、社会福祉法人多度津さくら会、㈳香川経済同友会、桃陵クリニック、特別養護老人ホーム桃陵苑、うどんの里丸正、お好み焼きわかやま、お食事処まんぷく食堂、フラワーショップじゅん、ペンションでぐち荘、ホテルトヨタ、葛上精肉店、岸本明輝税理士事務所、山﨑生花店、小畑長生治療院、民宿ちぐさ、民宿トキワ、民宿浦島屋、民宿細川、小畑哲雄、近藤典子、多羅尾尚、中数賀昭子、西山修、宮竹八千代、村井智子、村野巨樹、萩原妙子、新井陽子

訃報

前川 栄一　生駒北道院、253期生、大導師正範士七段、2015年10月27日逝去、64歳

原口 和彦　久留米暁道院、438期生、大導師准範士六段、2015年11月07日逝去、63歳

倉田 伊三　滋賀甲賀道院（元道院長）、325期生、大導師正範士七段、2015年11月11日逝去、68歳

佐藤 順一　福岡前原道院（元道院長）、241期生、大導師正範士七段、2015年11月18日逝去、67歳

◆本山職員募集

業務内容：各種行事の運営、事務全般
年　　齢：20歳～25歳（くらい）まで
学　　歴：高校卒業以上
資　　格：少林寺拳法初段以上
特　　記：パソコンがある程度できる方
お問い合わせ：総務部 総務課
Tel.0877-33-1010　E-Mail s-soumu@shorinjikempo.or.jp

職場という日常生活の中で、自己確立、自他共楽を実施しながら、人間力を高めませんか？　見学・体験も随時受け付けますので、ご相談ください。

◆僧籍編入のご案内

僧籍に編入し、金剛禅の教えを学び、伝え、身近なところから金剛禅運動を始めませんか。①僧籍に編入すると、金剛禅師家（しけ）から僧階「少導師」が補任され、輪袈裟（わげさ）と僧階教本Ｉが授与されます。②補任請願の受付期間：2016年2月1日(月)～2月29日(月)③補任日：2016年4月1日④詳細情報：2015年4月12日付マイページ画面「僧籍編入・僧階補任のご案内」をご覧ください。⑤手続きの流れ：道院長(代務含む)の許可を得て、道院長から手続きをします。まずは道院長にご相談ください。

●補任請願手続きについて……エリアサポートセンター
TEL:0877-56-6115　Mail：support@shorinjikempo.or.jp

編集後記▶2016年、明けましておめでとうございます。新春鼎談から、「よりよい社会、国づくりのために」について改めて思いました。「少林寺拳法教範」には「金剛禅と云うのは、（中略）人間の英知の活用……と、（中略）人間同士の拝み合い援け合いにより……、現世に於て平和で豊かな理想境を建設せんとする教えである」と示されています。金剛禅運動が、まさに人づくりによる国づくりの運動であること、そして今を生きる私たちが社会の動きに鈍感であってはならないことを深く感じました。

編集担当一同、金剛禅運動が活発に展開される一助となるよう、よりよい誌面づくりに努めてまいります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。（ふ）

表　紙▶河合 修　愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶

http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/

代表法話をはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅総本山少林寺　検索

あ・うん　金剛禅総本山少林寺広報誌　vol. 44　2016 睦月・如月

2016年1月1日発行（奇数月1日発行）
発行人：大澤　隆
発行所：金剛禅総本山少林寺
〒764-8511
香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48
☎0877-33-1010
http://www.shorinjikempo.or.jp
編集人：藤井省吾
印刷・製本：㈱ブル・ドック

広報誌『あ・うん』追加発送について

現在、広報誌『あ・うん』を、1道院につき門信徒10人以上の場合12部ずつ、9人以下の場合10部ずつ、一般財団支部は1部ずつ、毎号ご提供させていただいております。更に追加をご希望の方は、本山宗務部にお申し出ください（追加1部につき50円・送料別途要）。

TEL.0877-33-1010
e-mail：fukyoka@shorinjikempo.or.jp

一期一笑（いちごいちえ）

イラスト／大原由軌子

渡良瀬道院　中村　優子

笑顔のマイステップ

道院でコース制・MY STEPコースを始めて、もうすぐ二年を迎えようとしています。道院に通う少年部のお母さんたちに、修練が終わる時間より少し早く来ていただいて、子供たちと同じ空間（道院）の中で参加してもらっています。

MY STEPコースを始めたころは、「ニコッとしましょう！」と言っている自分も、お母さんたちも、笑顔になれなくてカチカチでした。それが今では全員が、自然と笑顔になっています。笑顔に自信がなかった私ですが、笑顔を心がけているうちに自然とできるようになり、私が笑顔になると、相手も笑顔になってくれるのです。お互いが笑顔でいると、心も体もリラックスさせてくれますし、何より明るい気持ちになれるのです。

お母さんたちに、なぜ続けてこられたのかを聞いてみました。すると、「ハードすぎない」「忘れても、一から教えてもらえる」「音楽に合わせて動いていると、時間がたつのが早く感じるほど楽しい」「うまくできなくても、笑いながら取り組むのが楽しい」などでした。

お母さんたちの笑顔を見れば、本当に楽しんでいただけているのが分かります。また、相対で取り組むときも、自然に二人で呼吸を合わせ、優しく受け入れたり柔らかく認め合ったり、お互い調和がとれるようになっています。そんな姿を見て、私自身も何だかとてもうれしくなります。

これからも、お母さんたちにとって、明日への活力の場になるように盛り立てていければと思っています。

投稿大募集　道場や拳士のちょっといい話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒764-8511 香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48　金剛禅総本山少林寺 広報誌担当宛　TEL.0877-33-1010　FAX.0877-56-6022　e-mail：aun@shorinjikempo.or.jp

Nio Ken, Soto oshi uke geri

宗門の行としての少林寺拳法

仁王拳（におうけん）　外押受蹴（そとおしうけげり）

振突（ふりづき）に対する反撃技。

布陣によって異なるが、千鳥入身（ちどりいりみ）や差替足（さしかえあし）など、足捌（さばき）を併用することで、安定した体勢での力強い外押受を行うことができる。また、受けの際は、手首をしっかりと返すことで、腕刀（わんとう）に力が充実する。

蹴り反撃は、受けに重心を乗せた逆の足で瞬時に蹴り返すこと。

撮影／近森千展　文／永安正樹　演武者／守者：飯野貴嗣 准範士六段　攻者：永安正樹 准範士六段

SHORINJIKEMPO
少林寺拳法